九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代日本語のテンス・アスペクトと否定 : 過去の「-シタ？」と「-シナカッタ」 / 「-シテイナイ」 / 「-シナイ」

山村, ひろみ

https://doi.org/10.15017/21682

出版情報：言語科学. 47, pp.61-81, 2012-03. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

現代日本語のテンス・アスペクトと否定

–過去の「ーシタ？」と「ーシナカッタ」/「ーシテイナイ」/「ーシナイ」–*

山　村　ひ　ろ　み

１．はじめに

現代日本語の動詞述語形式「ーシタ」には過去の事態を表すというテンスの機能と完了した事態を表すというアスペクトの機能があり，それは以下に示す質問文における否定応答の形式において明らかになる[1].

(1) a. 先月、中国へ<u>行きましたか</u>？/ いいえ、<u>行きませんでした</u>。
　b. もう、中国へ<u>行きましたか</u>？/ いいえ、まだ<u>行ってません</u>。（工藤 1995:129）[2]

(1a)(1b)の質問文はどちらも「ーシタ」で表出されているが，その否定の応答文には，過去の否定形である「ーシナカッタ」と完了の否定形である「ーシテイナイ」の異なる形式が現れている．このことから，現代日本語の「ーシタ」は過去のテンスと完了のアスペクトという 2 つの異なるカテゴリーを兼ね備えたものという解釈が提示されているのであるが，この解釈自体の妥当性については異論がないわけではない[3].

一方，このような「ーシタ」によって表出された質問文の否定応答文に「ーシタ」と「ーシテイナイ」の 2 つの形式が存在するという事実は，日本語を学習する者，とりわけ，肯定文と否定文のテンス・アスペクトにおいて対称性が維持される言語を母語とする学習者にとっては，理解し難い文法項目のひとつとなっている[4]．そのため日本語教育の現場では往々にして，(1a)の「先月」のように明確

---

* 本稿は 2011 年 9 月 12 日に西南学院大学で開催された「西南言語対照研究会」で発表した「「ーシタ？」と「ーシナカッタ」/「ーシナイ」/「ーシテイナイ」」の内容を修正・発展させたものである．同会に出席した方々から頂いた貴重なご意見・批判には記して感謝の意を表したい.

[1] 本稿では，「読んだ/読みました」のように，過去・完了を表す「タ」を伴った形式は「ーシタ」，その否定形「読まなかった/読みませんでした」は「ーシナカッタ」，「読まない/読みません」のように，非過去を表す「ル」の否定形は「ーシナイ」，「読んでいない/読んでいません」のように，継続を表す「テイル」の否定形は「ーシテイナイ」で代表させる．また，例文中で問題になる形式は下線を引いて示す.

[2] 例文にある a, b は筆者の追加.　以下，必要に応じて引用元の用例の体裁には変更が加えられている.

[3] 「ーシタ」に過去と完了の異なる 2 つの機能があるという説に異論を唱える研究は，「ーシタ」には専ら過去を表すテンスの機能しかないとするものと，「ーシタ」には専ら完了を表すアスペクトの機能しかないとするものである．このように，「ーシタ」に過去というテンス機能と完了というアスペクト機能の両方を認める説に対する異論は，「ーシタ」という同一の形式にテンスとアスペクトという異なる 2 つの機能を認めることに対する反論である．詳しくは福田(2001)，また，同論文が掲載された月刊『言語』の「ーシタ」の特集号を参照されたい.

[4] Cf. ザトラウスキー(1983), p.49. 例えば，スペイン語では，以下の例が示すように，(1a)のように過去の

に過去時を指示する副詞と共起するような否定文では「－シナカッタ」を，また，(1b)の「まだ」のように，完了的解釈を喚起するような副詞と共起するような否定文では「－シテイナイ」を用いるといった機械的な説明が行われたり，以下のように，「－シタ」と「－シテイナイ」の使い分けは，「－シタ」によって表出された質問文事態の実現可能な生起時とそれに対する応答文の発話時の近接性の違いに従うといった説明が行われる．

(2) A：(午後 6 時ごろに)　昼ご飯を食べましたか.
　B１：はい，｛φ/*もう｝食べました.
　B２：いいえ，｛食べませんでした/*まだ食べていません｝.

(3) A：（午後 1 時ごろに）昼ご飯を食べましたか.
　B１：はい，｛φ/もう｝食べました.
　B２：いいえ，｛?食べませんでした/まだ食べていません｝.　（庵 2001:145）

庵(2001:145)によれば，(2)の応答文で「－シナカッタ」が出現したのは，質問文の事態「昼ご飯を食べる」が実現可能な生起時とその質問に対する応答時が遠くかけ離れているからであり，一方，(3)の応答文で「－シテイナイ」が出現したのは，質問文の事態の実現可能な生起時とその質問文に対する応答時が時間的に近接しているためだという．

しかしながら，多くの日本語学習者は上記のような説明に疑問を抱くことが少なくない．というのも，日本語母語話者が交わす実際の日本語会話では，次に示すような，先に見た説明では理解しにくい質疑応答が頻繁に聞かれるからである．

(4) a. テレビの「徹子の部屋」は昨日御覧になりましたか．/ 昨日は見てないですけども．
（ザトラウスキー1983：50）
　b. 昨日，私の悪口言ったでしょ？/ 悪口なんか言わないよ．（工藤 2010:310）

(4a)では，「昨日」という明確な過去時を示す副詞を伴った「－シタ」の質問文に対する否定応答として「－シテイナイ」が出現しているのみならず，その否定応答文の中にも同じ「昨日」が出現している．また，(4b)では，同じく「昨日」を伴った「－シタ」の質問文に対する否定応答として「－シナイ」という非過去を示す「－スル」の否定形が出現している．(4a)(4b)の否定応答文は前述の日本語教育の現場で行われている説明とは相容れないものであり，このような例を耳にした日本語学習者は，確かに戸惑うに違いない．

そこで，本稿は，まず，過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答として出現す

事態に言及した質問文の否定的応答には同じ過去形が，また，(1b)のように，現在完了的な事態に言及した質問文の否定的応答には同じ現在完了形が出現する．
(1)' a. ¿ Fue(ir「行く」の点過去) Juan a China el mes pasado? --- No, no fue (ir「行く」の点過去).
　フアンは先月中国へ行きましたか.　いいえ，行きませんでした.
　b. ¿ Ya ha ido(ir「行く」の現在完了) Juan a China ? --- No, todavía no ha ido. (ir「行く」の現在完了).
　フアンはもう中国へ行きましたか.　いいえ，まだ，行っていません.

るテンス・アスペクト形式の実態，すなわち，過去の「－シタ」によって表出された質問文に対する否定応答文にどのようなテンス・アスペクト形式が出現しうるのかを主に先行研究のデータを基に観察し，その後，そのような形式が出現するに至ったメカニズムを当該形式の機能という観点から考察する．

本稿の構成は次の通りである．本節に続く第 2 節では，過去の「－シタ」によって表出された質問文に対する否定応答として出現するテンス・アスペクト形式の問題を扱った先行研究を概観すると同時に，それらの先行研究で扱われたデータを提示する．第 3 節では，過去の質問文に出現する「－シタ」，その否定応答として出現する可能性のある「－シナカッタ」「－シナイ」「－シテイナイ」という形式それぞれの機能を規定しながら，それらが過去の「－シタ」による質問文に対する否定応答として出現するメカニズムを明らかにする．第 4 節では，それまでの分析・考察のまとめを行う．

２．先行研究概観

本節では，本稿が対象とする過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答に出現する動詞形式の実態あるいはその解釈に焦点を当てた先行研究を概観する．周知のとおり，現代日本語のテンス・アスペクトの問題については膨大な研究があるが，過去の「－シタ」の質問文に対する否定応答として出現するテンス・アスペクト形式を実証的に扱ったものは少ない．以下では，その少ない先行研究のうち筆者が入手することのできたものをそのテーマ別に見ていく．

２．１．ザトラウスキー（1983）

ザトラウスキー(1983)は，第 1 節でも指摘された「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答文の動詞形式に対して感じる日本語学習者の戸惑いを強く意識しながら，まず，当該否定応答文に出現する動詞形式の実態を電話調査という方法で明らかにし，その結果を語用論的観点から分析したものである．

ザトラウスキー(1983)が実施した電話調査とは次のようなものである．まず，当時の東京の電話帳から山手地域の杉並区あるいは下町地域の墨田区に住む人の電話番号を無作為に約 500 名分抽出．その後，その抽出された電話番号に日本人女性 5 人が電話をかけ，「何々は過去に見たか」（例：テレビの「徹子の部屋」は昨日御覧になりましたか.」）と「何々はもう読んだか」（例：黒柳さんが書いた「窓ぎわのトットちゃん」はもうお読みになりましたか.）という質問をし，その否定応答文の形式を調査した．もし電話の相手から否定応答が得られない場合には，否定応答が得られるまで次々と別の質問を行っていった（例：それでは「ザ・ベストテン」という番組は先週の木曜日の夜に御覧になりましたか．それでは「チャックより愛をこめて」という本はもうお読みになりましたか）．一方，電話の相手から否定の応答が得られた場合には，その番組や本に対する関心度を測る質問をした（例：「○○」という番組があることはご存知でしたか．昨日見ようと思っていらっしゃいましたか．御覧になったことがありますか．よく御覧になりますか．「○○」という本のことはご存知でしたか）[5].

以上の方法で実施された電話調査の結果をまとめると，次のようになる[6].

---

[5] Cf. ザトラウスキー(1983), pp.49-50.
[6] Cf. ザトラウスキー(1983), pp.50-53.

i. 「何々は過去に見たか」という過去の「ーシタ」によって表出された質問文に対する否定応答においては,「見ていない」が 50%と最も多く，その後,「見ない」が 20%,「見なかった」が 13%,「見ていなかった」が 2%と続く.

ii. 「何々はもう読んだか」という完了の「ーシタ」の質問文に対する否定応答においては,「読んでいない」が 89%と圧倒的に多く,「読まない」が 11%でそれに続く.

iii. 「何々は過去に見たか」という過去の「ーシタ」によって表出された質問文に対する肯定応答においては,「見た」が 76%と最も多く，その後,「見ている」が 18%,「見ていた」が 4%,「見る」が 2%と続く．一方,「何々はもう読んだか」という完了の「ーシタ」の質問文に対する肯定応答においては,「読んだ」が 97%で，その後,「読んでいる」が 3%でそれに続く.

iv. 否定応答における動詞の形式と電話相手の当該番組や本に関する関心との関係については,「見なかった」は当該対象に対する関心が高いほど多く使われたのに対し,「見ない」は逆の傾向を示した．これに対して,「見ていない」は関心の高さが極端に低いか高いときにはあまり使われないが，それ以外のときには大きな差はなかった．一方,「読んでいない」と「読まない」の出現については，関心の高さによって変化するということはあまりなかった.

ザトラウスキー(1983)は以上の電話調査の結果から，以下の考察をしている[7].

a. 上記の電話調査の結果 i は，日本語の「ーシタ」に対する従来の見解，すなわち，同形式には過去のテンスを表す機能と完了のアスペクトを表す機能があり，それは「ーシタ」によって表出された質問文に対する否定応答文における出現形式によって明らかである，という見解とは一致しないものである.

b. a から,「従って，日本語にはテンスの概念があるとは言い難いのではないだろうか. むしろ「タ」形は過去と完了を両方を含む，もっと広い完成相ともいうべきアスペクト的な意味を表すと考えるのが適当であろう[8].」ということになる.

ザトラウスキー(1983)は，以上の考察の後,「ーシタ」を用いた質問文に対する否定応答に出現した各形式の機能を，質問文が言及したテレビ番組や本に対する被調査者の関心の度合いから分析した．その結果をまとめると，次のようになる[9].

① 「見なかった」という否定応答は,「昨日見ようと思っていたけれど，見なかった」あるいは「他の日は見たけれど，昨日は見なかった」といった特別の心理の下に出現した形式である．これは「見なかった」が話し手の側に一種の語用論的「枠」ができて初めて出現することを示唆するものである．つまり,「見なかった」は,「昨日見ようと思っていた」という語用論的「枠」に対して「見ない」ということが成立したこと，あるいは,「他の日は見た」という語用論的「枠」に対して昨日は「見ない」ことが成立したこと，を表したものということである.

② 「見ていない」という否定応答は,「昨日見ないで，その状態が続いている」,「昨日も他の日も

---

[7] Cf. ザトラウスキー(1983), pp.53-56.
[8] Cf. ザトラウスキー(1983), p.55.
[9] Cf. ザトラウスキー(1983), pp.57-60.

見ないで，その状態が続いている」という非完成の継続を表したものである．

③ 「見ない」という否定応答は，「昨日見ない」あるいは「昨日も他の日も見ない」ということをひとつの事実全体として伝える形式である．「昨日も他の日も見ない」ということは当該番組に対する関心の低さを示唆するものであるが，これは先に見た電話調査結果の iv に合致するものである．

④ 「見ていない」「見ない」が「見なかった」よりも多く出現したのは，当該事態が生起していないのに，それが生起したことを表す完成相の形式で表現するのが不自然だからである．

⑤ 「見ていない」「読んでいない」が「見ない」「読まない」よりも圧倒的に多く出現したのは，一種の待遇表現的効果のためだと思われる．つまり，「見ない」「読まない」は当該事態の非生起の事実を伝えるだけであるが，「見ていない」「読んでいない」は「ーシテイル」の存在により，当該事態の非生起を会話の「今」と結びつけることが可能で，それが被調査者の調査者に対する協力的な態度の表明に繋がる．

以上，ザトラウスキー(1983)を概観した．同論文は，日本語学習者が持つであろう素朴な疑問を出発点とし，「ーシタ」によって表された質問文に対する否定応答に見られるテンス・アスペクトの実態を，電話調査という大規模かつ自然な日本語会話の採集データを基に明らかにしたという点で高く評価されるものである．また，その調査結果を基に，これまで定説ともなっていた「ーシタ」は過去のテンス機能と完了のアスペクト機能を合わせ持つという見解に対し，「ーシタ」にはテンスの概念があるとは言い難く，その機能は過去と完了の両方を含む広い意味での完成相アスペクトの表示にあるとした点も，従来の日本語のテンス・アスペクト解釈に対して一石を投じたもので看過できないものと言える．しかし，同論文には以下に述べるような問題点がある．

まず，ザトラウスキー(1983)の問題点のひとつは，「ーシタ」によって表出された質問文およびその否定応答に出現する動詞として「見る」と「読む」の 2 つの動詞しか扱っていないという点である．次に見る山下(2001)が明らかにしたように，過去の「ーシタ」によって表された質問文に対する否定応答文に出現するテンス・アスペクトの形式は「ーシタ」によって表された動詞の種類によって異なることがある．従って，この過去の「ーシタ」で表された質問文の動詞の種類とその否定応答文に出現するテンス・アスペクト形式の関係を一般化するには，「見る」「読む」以外の動詞も扱う必要がある．

次に，ザトラウスキー(1983)の独自性を際立たせている「語用論的「枠」」という用語の問題である．同論文は，この「語用論的「枠」」の存在を「見なかった」のような「ーシナカッタ」が出現する際の条件としているが，この「語用論的「枠」」が何を指すのかの厳密な定義は提示されていない．その結果，この「語用論的「枠」」が過去の「ーシタ」によって表された質問文に対する応答においてのみ設定されるものなのか，それとも，過去の「ーシタ」およびその否定「ーシナカッタ」の一般的機能記述に関係してくるものなのかの判断がつかない．ザトラウスキー(1983)にとって，この「語用論的「枠」」という用語はある種決定的な意味を持つものだけに，その定義上の曖昧さは惜しまれるところである．

２．２．山下（2004）

山下(2004)は，2 名の日本語学習者，アッタニーポーン・馬(2002)が日本語母語話者 30 名に対して実施した「過去に言及した「ーシタ」によって表された質問文に対する否定応答に「ーシナカッタ」

と「－シテイナイ」のどちらを用いるか」という調査の結果を基に，当該質問文に対する否定応答には「－シテイナイ」が出現することが珍しくないことを指摘した上で，当該質問文に対する否定応答で「－シナカッタ」が出現する際の条件を検討したものである．その結果，山下(2004)は，過去に言及した「－シタ」に対する質問文に対する否定応答に「－シナカッタ」が出現する際には，話し手と聞き手の間に「過去の場の共有」が存在すると結論づけている．しかし，本稿がまず注目したいのは，山下(2004)の中で紹介されているアッタニーポーン・馬(2002)が日本語母語話者 30 名に対して行った調査とその結果である．

アッタニーポーン・馬(2002)は男性 13 名，女性 17 名（そのうち大学生 25 名，社会人 5 名）の計 30 名からなる日本語母語話者に対し，過去の「－シタ」を用いた質問文に対して否定で答える際に最も自然だと思われる形式を選択させる調査を行った．その質問表と結果の一部を以下に示す．なお，【　】内の数字は，当該形式を最も自然だとした者の数を示す．

(5)　あなたは指導教官にどう答えますか.
　　指導教官：先週，勉強会に行った？
　　学生：【14】いえ，行きませんでした.
　　【5】いえ，行っていません.
　　【4】いえ，行かなかったです.
　　【7】いえ，行ってないです.　　（山下 2004: 4）

上記の応答部分を見て分かるように，アッタニーポーン・馬(2002)では丁寧体と普通体が別々の選択肢として提示されている．しかし，本稿の目的にとっては丁寧体と普通体の区別は関与しないので，上記の質問表とその結果を普通体にまとめて提示し直すと次のようになる．

(5)'　あなたは指導教官にどう答えますか.
　　指導教官：先週，勉強会に行った？
　　学生：【18】いえ，行かなかったです.
　　【12】いえ，行ってないです.

すなわち，(5)'の過去の「－シタ」を用いた質問文に対する否定応答では，過去の「－シナカッタ」が 30 名中 60%の 18 名，完了の「－シテイナイ」が 30 名中 40%の 12 名によって選択されたということになる．ここでも，先に見たザトラウスキー(1983)と同様に，過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答には必ずしも「－シナカッタ」が出現しないことが確認されるが，それ以上にアッタニーポーン・馬(2002)が興味深いのは，過去の「－シタ」を用いた質問文として 10 種類の異なる動詞を採用したことで，その結果，否定応答に出現する「－シナカッタ」と「－シテイナイ」の選択には質問文に出現する動詞の種類が関与するということが明らかになった．以下，アッタニーポーン・馬(2002)の調査において採用された動詞別に過去の「－シタ」を用いた質問文に対する否定応答に出現する「－シナカッタ」と「－シテイナイ」の傾向を示す．なお，表中の【　】内の数字は，当該形式を最も自然だとした者の数を示す．

表１：アッタニーポーン・馬(2002)による動詞別過去の「－シタ」に対する否定応答の形式

質　問　文　過去の「－シタ」	否定応答「－シナカッタ」	否定応答「－シテイナイ」
勉強会に行った？	行かなかったです【18】	行ってないです【12】
お酒を飲みましたか？	飲まなかったです【11】	飲んでないです【19】
フランス大会を見ましたか？	見なかったです【12】	見てないです【18】
またインドに行ったの？	行かなかったです【25】	行ってないです【5】
～の家でも聞こえましたか？	聞こえなかったです【27】	聞こえてないです【3】
今年も行きましたか？	行かなかったです【19】	行ってないです【11】
富士山，見えましたか？	見えなかったです【27】	見えてないです【3】
ワールドカップの試合，見ましたか？	見なかったです【15】	見てないです【15】
山田先生の授業，分かった？	分からなかったです【29】	分かってないです【1】
小さい時に水泳できたんですか？	できなかったです【28】	できてないです【2】

表１において注目すべきは，次の点である．まず，アッタニーポーン・馬(2002)も指摘していたように，「聞こえる」「見える」のような知覚動詞の自発態，また，「分かる」のような工藤(1995)の言う内的状態動詞，「できる」のような能力を表す動詞は否定応答として専ら「－シナカッタ」の形式を取るのに対し，「見る」は，ザトラウスキー(1983)における電話調査の結果と同じく，その否定応答として「－シテイナイ」の形式を取ることが多いというように，同じ過去の「－シタ」に対する否定応答であっても質問文に出現する動詞の意味特徴に従って出現するテンス・アスペクト形式は異なるということである．また，同じ過去の「行った？」という質問文であっても，「またインドに行ったの？」のように「また」という副詞，「今年も行きましたか」のように「も」といった係助詞が共起すると，その否定応答文には「－シナカッタ」の形式が出現しやすいということも看過すべきではない．しかし，残念ながら，山下(2004)では以上のことについての分析は行われていない．それは，山下(2004)の主たる関心が，過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答として「－シナカッタ」の形式が出現する際の条件を明らかにすることにあったことと無関係ではなかろう．

山下(2004)は，前述のアッタニーポーン・馬(2002)の調査結果を踏まえながら，過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答として「－シナカッタ」の形式が出現する際の条件は，次の例文が示すように，話し手と聞き手の間に「過去の場の共有」が存在することであると指摘している．

(6)　学生：昨日小樽へ行きました.
先生；おもしろかったですか.
学生：ええ，とても．いろんなところへ行きました.
先生：○○ガラスでガラス細工を<u>買いましたか</u>.
学生：いいえ，行ったんですけど，お金がなかったので<u>買いませんでした</u>.　（山下 2004:7）

山下(2004: 7)によれば，(6)の「買いましたか」という過去の「－シタ」の質問文に対して「買いませんでした」という「－シナカッタ」の否定応答が出現したのは，「過去の場の設定→質問→答え」と

いう流れが存在するからだという．そして，話し手と聞き手が共有する「過去の場の設定」が存在しない場合は，(7)が示すように，「ーシナカッタ」による否定応答は不自然になり，(8)のような「ーシテイナイ」の形式を取る方が自然になると指摘している．

(7) 教師：ホセさん，昨日，小樽へ行きましたか.
　学生：いいえ，行きませんでした.　（山下 2004: 6）

(8) 教師：ホセさん，昨日，小樽へ行きましたか.
　学生：いいえ，行ってませんけど...　（山下 2004: 7）

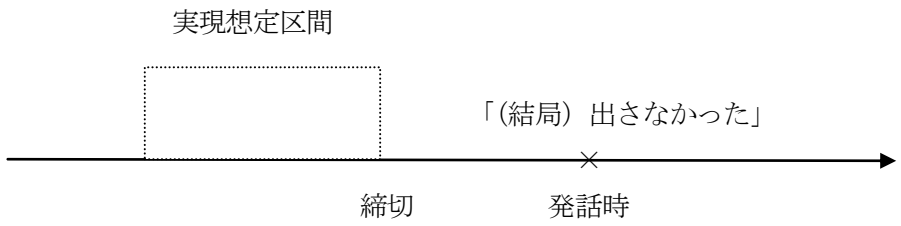
山下(2004: 7)は，教師が学生に(7)の質問文を発した場合，学生の否定応答として(8)の「ーシテイナイ」の方が自然になる理由を次のように説明している．すなわち，話し手である教師と聞き手である学生の間に共通の「過去の場の設定」が存在しないところで(7)の質問をされた学生は，まず，「なぜ，このような質問をされるのだろう」といぶかしく思う．その結果，自分の発話時の状況とその質問が何か関係するのかと思い，取りあえず，発話時との関係を明示する「ーシテイル」の否定形を用いるというのである．しかし，ここで問題になるのは，山下(2004)が用いる「過去の場の設定」という用語の意味するところである．例えば，(7)の質問文に対する否定応答として「ーシナカッタ」が出現するための「過去の場の設定」とはどのようなものなのだろうか．確かに，(7)の「昨日，小樽へ行きましたか」という過去の「ーシタ」を用いた質問文は，(6)の「ガラス細工を買いましたか」という質問文とは異なり，「過去の場」を設定する文脈を欠いている．しかし，(6)の「昨日小樽へ行きました」のような「過去の場」を設定する文脈を欠いていても，もし(7)の教師が当該学生が前日小樽へ行く可能性があるということを知っており，学生もそのことを承知している場合であれば，(7)の否定応答として「ーシナカッタ」が出現することは極めて自然なものになる．このとき，教師と学生の間にある「前日当該学生が小樽へ行く可能性があった」という了解事項は，山下(2004)の言う「過去の場の設定」と見なされるのか否か．そのような観点から，山下(2004)の言う「過去の場の設定」にはその定義の厳密化が求められる．

２．３．井上（2001）

井上(2001)は前述の２つの先行研究とは異なり，「ーシタ」の質問文に対する否定応答の形式を論じたものではない．しかし，その一部に「ーシタ」による質問文に対する否定形式についての議論が含まれているので，ここで取り上げることにした．

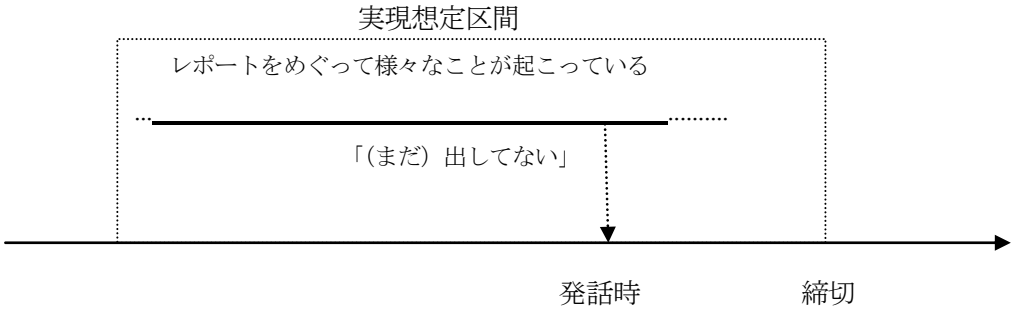
井上(2001:132-133)は，「「（結局）シナカッタ」は「実現想定区間内に当該の出来事が実現されないまま終わった」ということを表す．「シタ」は出来事が実現すれば使えるが，「シナカッタ」は実現想定区間をすぎなければ使えないのである．」と述べ，以下の例と図をあげている．

(9)　（昨日はレポートの提出日であった）
　甲：昨日，レポート出した？
　乙：いや，（昨日は結局）出さなかった.



一方，井上(2001:133)は，「発話時が当該の出来事の実現想定区間内にあり，出来事の非実現が最終的に確定されないうちは，「(マダ) シテイナイ」が用いられる．つまり，「現在有効な統括主題に従属する事例の中に当該の出来事は存在しない」という形で叙述がなされるわけである」と述べ，以下の例と図をあげている．

(9) (甲と乙はレポートの提出期限を翌日にひかえている)
甲：(もう) レポート出した？
乙：いや，まだ出していない．/??いや，出さなかった．



また，井上(2001:134)は，「日本語の「シタ」は，出来事が実現された時の経過が把握できていなければ使えないが，これと並行的に，「シナカッタ」も，出来事が実現されないまま終わった経過が把握されていなければ使えない．「シナカッタ」が使えない場合は，「(*モウ) シテイル」に対応する否定形式「(*マダ)シテイナイ (「マダ」の意味をともなわない「シテイナイ」) が用いられることになる．(下線は引用者)」とし，次の例をあげている．

(10) 乙：この間注文した『「た」の言語学』，まだ入りませんか？
甲：あれ？乙さん，『「た」の言語学』を注文されてましたっけ．この間いただいたハガキには書いてありませんでしたけど．(乙に注文のハガキを見せる．)
乙：(注文のハガキを見て) 本当だ．確かに注文してません (??注文しなかったです) ねえ．

そして，井上(2001:135)は，「「(結局) シナカッタ」は，当該の出来事の実現想定区間が過去に存在したこと，いいかえれば，過去のある時において当該の出来事が実現される可能性があったことを認めるというニュアンスをともなう．そのため，話し手が当該の出来事が実現される可能性そのものを認めない場合は，やはり「(*マダ)シテイナイ」が用いられることになる．」と述べ，次の例をあげている．

(11)　甲：乙さん，この間，電車の中で女の人とキスしてたでしょ.
　　乙：a. 何言ってんですか．キスなんかしてませんよ.
　　b. 何言ってんですか．キスなんかしませんでしたよ.

つまり，井上(2001:135-136)によれば，「「シナカッタ」を用いたbは，「あの時電車の中でキスをする可能性はあった（が，実際はしなかった）」というニュアンスを含む発話である．これに対し，「(*マダ)シテイナイ」を用いたaは，「私はこれまでいろいろなことをやっているが，その中には『あの時電車の中でキスをする』などということはない（そのような経歴を有するような人間ではない）」ということを述べる一種の属性叙述である.」ということになる.

以上，いささか詳しく井上(2001)を見てきたが，この井上(2001)に対する本稿の考えを以下に記す.

まず，「「（結局）シナカッタ」は「実現想定区間内に当該の出来事が実現されないまま終わった」ことを表し，「発話時が当該の出来事の実現想定区間内にあり，出来事の非実現が最終的に確定されないうちは，「（マダ）シテイナイ」が用いられる」というのは，先に見た日本語教育の現場で行われている庵(2001)の説明と大きく異なるものではない．従って，この解釈は日常の日本語会話に出現する過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答のすべてを説明できるものではない.

一方，「ーシナカッタ」に対する井上(2001)の「「シナカッタ」も，出来事が実現されないまま終わった経過が把握されていなければ使えない.」という指摘は，井上(2001)に独自のものであり，一考に値する．井上のこの指摘は，「「日本語の「シタ」は，出来事が実現された時の経過が把握できていなければ使えない」という「ーシナカッタ」に対応する肯定形「ーシタ」の機能を受けてのものであるが，今，特に，「ーシナカッタ」という否定形式に注目するならば，分かりにくい部分がある．例えば，先に見たザトラウスキー(1983)の電話調査において「何々は過去に見たか」という過去の「ーシタ」の質問文に対する否定応答では「見ていない」が50%と最も多く出現し，「見なかった」は13%に過ぎなかったという事実である．ザトラウスキー(1983)の調査にある質問文の主語の指示対象は話し手本人であり，また，「ーシタ」で示された質問の事態の生起は「昨日」「先週」のように発話時から比較的近い．つまり，ザトラウスキー(1983)の調査に出現した過去の「ーシタ」に対する否定応答は，話し手にとって当該事態が実現されないまま終わったことが容易に把握されるものだったにも拘らず，「ーシナカッタ」ではなく「ーシテイナイ」で表出されているのである．このことは上記の井上(2001)の見解ではどのように解釈されることになるのか，それが問題なのである.

また，井上(2001)は，「「（結局）シナカッタ」は，当該の出来事の実現想定区間が過去に存在したこと，いいかえれば，過去のある時において当該の出来事が実現される可能性があったことを認めるというニュアンスをともなう」と述べているが，これは山下(2004)の「過去の場の設定」の定義に関して本稿が疑義を呈した際に提示した見解と同じものである．つまり，「ーシナカッタ」という形式が出現する背景には，当該事態が生起する可能性と生起しない可能性の両方が想定されており，「ーシナカッタ」はこの2つの可能性の選択の結果出現したものという解釈である.

さらに，井上(2001)は，上記の「ーシナカッタ」の説明の後，「そのため，話し手が当該の出来事が実現される可能性そのものを認めない場合は，やはり「(*マダ)シテイナイ」[10]が用いられることになる.」，また，「（中略），「(*マダ)シテイナイ」を用いたaは，「私はこれまでいろいろなことをやって

[10] 井上(2001:134)によれば，「(*マダ)シテイナイ」は「まだ」の意味をともなわない「シテイナイ」を示す.

いるが，その中には『あの時電車の中でキスをする』などということはない（そのような経歴を有するような人間ではない）」ということを述べる一種の属性叙述である.」と述べているが，このうち「－シテイナイ」を指示対象の「一種の属性叙述」としている部分は問題を孕んでいる．井上(2001)はもともと同じく過去に言及することのできる主文末の「－シタ」と「－シテイル」の機能的違いの解明を目指したものであり，前述の見解もその議論の中で提示されたものであるが，ここで、特に、指示対象の「属性叙述」という点に注目するならば，それは必ずしも「－シテイナイ」だけに特有の機能とは言えない．次の例が示すように，それは「－シナイ」という非過去「－スル」の否定形式によっても表出されるからである.

(11)’ 甲：乙さん，この間，電車の中で女の人とキスしてたでしょ.
乙： 何言ってんですか．キスなんかしませんよ.　　（引用者により(11)を一部変更）

つまり，井上(2001)の説明では，指示対象の属性を叙述する「－シテイナイ」と「－シナイ」の違いがはっきりしないのである．このような過去の「－シタ」によって表出された事態を非過去の「－シナイ」で否定するという現象は先に見たザトラウスキー(1983)の電話調査においても確認されていたが、次に見る工藤(2010)は、まさにこの現象に焦点をあてた研究である。

２．４．工藤（2010）

工藤(2010: 308-309)は，アスペクト・テンスと否定の関係という観点から見ると，自然言語にはドイツ語のように肯定と否定の形式が対称的になるものとビルマ語のように肯定と否定の形式が非対称的になるものがあり，標準日本語は，一見ドイツ語と同じく，肯定と否定の形式が対称的な関係にある言語のように見えるが，問題はそう単純ではないと指摘している．そして，アスペクト・テンスと否定の関係という観点から見たときに標準日本語が持つ問題として，工藤(2010 : 309-310)は，①〈動的な事象の時間的展開の捉え方〉を示すアスペクトの対立が成立するのは「開ける」「歩く「来る」「食べる」のような〈運動動詞〉においてであり，その完成相は当該運動を時間的に限界づけて捉え，その継続相は当該運動を時間的に限界づけないで継続的に捉えるが，アスペクト対立がこのようなものだとすると，〈運動の非実現〉を表す否定述語では〈完成－継続〉のアスペクト対立は成立しえないはずであるが，実際の日本語では否定述語においてもアスペクト対立は存在する，この矛盾をどう考えるべきか[11]，②日本語にはテンスがあり，当該事態が発話時以前に成立したものか否かによって「スル」と「シタ」を義務的に使い分けなければならないが，否定述語では〈過去〉のことに「シナカッタ」だけでなく「シナイ」が使用できる．しかし，この現象は常に起こるわけではない，このような現象が生じる理由は何なのか，の二点をあげている[12]．このうち本稿が取り上げるのは，②の過去の

---

[11] 本稿ではこの①については扱わないが，工藤(2010)によれば，〈運動の非実現〉においても「30 分待ったが，バスは来なかった」「停留所に着いた時，バスは来ていなかった」のようなアスペクト対立が成立するのは，〈プラグマティックな話し手の肯定的想定〉が存在するからだと言う．つまり，「30 分待ったが，バスは来なかった」には，話し手の「30 分待った後にバスが来る」という「肯定的想定としての完成」があり，「バスは来なかった」はその完成の否定を表しているのに対し，「停留所に着いた時，バスは来ていなかった」には，話し手の「停留所に着いた時に，バスは来ている」という「肯定的想定としての結果状態」があり，「バスは来ていなかった」はその結果状態の否定を表しているということである.

[12] ①②における時制形式の表示また表記の仕方は工藤(2010)に従ったものである.

否定述語に「シナイ」が出現するという事実とそれに対する工藤(2010)の解釈である．以下，この問題に対する工藤(2010)の議論を概説していく．

まず，工藤(2010：322)は，標準日本語では次の例が示すように，否定の場合には，過去のことに非過去形が使用できる場合が多いことを指摘している．

(12) 「稽古で動けなくなった時，お前泣いたろう」
「泣かん」
「いや，泣いた．…」　　（工藤 2010: 322『北の海』[13]）

(13) 「どうしたの，高原さんとケンカでもした？」
「しませんよ．ただ，罪もない人に怒っちゃったから，気が滅入っているだけ」
「またァ．ホントはケンカしたでしょ．ね，どうだったのよ，デートは」
「何もないわよ」　　（同上『思い出にかわるまで』）

工藤(2010: 322-323)は，上記の「泣かん」「しませんよ」のように，相手の「泣いただろう」「ケンカしたのではないか」という推量に対する「発話時における話し手の主体的な（パフォーマティブな）な打ち消し」を「否認」と呼び，この「否認」はコンテクスト上に「相手の肯定的想定」が言語的に明示されている時のみ可能であると述べている．以下の例を参照されたい．

(14) 「きのう，東京の家に電話したんですって．そしたら私たちがこちらに来ているというので，すぐ追いかけて来たんですって」
「追いかけてなんか来ませんよ（追いかけてなんか来ませんでしたよ）」（同上，『花壇』括弧内は引用者）

(15) 「ごめんなさい，寝すごしてしまって」
「あんまりよく寝ているので起こさなかった（*起こさない）」（工藤 2010:324，『金環蝕』括弧内は引用者）

工藤(2010:323)によれば，(14)において「追いかけてなんか来ませんよ」という「－シナイ」が出現しているのは，その前文に「すぐ追いかけてきたんですって」という「相手の肯定的想定」を明示する表現が存在するからであり，逆に，(15)において「起こさない」という「－シナイ」が出現不可能なのは，その前文に「起こした」という「相手の肯定的想定」を明示する表現が存在しないからである．工藤(2010: 323)は，このことを次のようにまとめている．

(16)　1) 相手の肯定的想定が明示（言語化）されていない場合→過去形
　　2) 相手の肯定的想定が明示（言語化）されている場合→非過去形を使用することによって話し手の否認という主体的側面を前面化

---

[13] 『』は工藤(2010)にある引用元の書名を示す．

また，工藤(2010: 324)は，相手の肯定的想定が言語化され，過去のことに非過去形の使用が可能になっている場合には，「「なんか」「など」を伴って，「ありえない」といった〈話し手の評価的感情〉が前面化する場合が多い．次のように「けっして」を伴っている場合も，客観的に〈過去における運動の非実現〉を述べているのではなく，発話時における〈否認〉という〈主体的な否定的主張〉を前面化させている（下線は引用者）」とも述べ，次の例をあげている．

(17) 「それだけ分かっていらっしゃるのに，なぜあなたはあの事を世間に言いふらしたりなさったの…」
「いえ，僕は決して，言いふらしたりなんか致しません」　（工藤 2010: 324『金環蝕』）

工藤(2010)は，過去の「ーシタ」に対する否定応答として「ーシナイ」が出現する際の条件を明確化したという点で重要なものである．確かに，(14)(15)の対照からも明らかなように，相手の発する前文に当該事態の肯定的想定が明示されていない場合には，過去の「ーシタ」の否定応答として「ーシナイ」が出現することはない．仮にそのような環境において「ーシナイ」が出現することがあっても，それは過去の「ーシタ」の否定として解釈されることはなく，あくまで非過去「ースル」の否定として解釈されることになる．

また，工藤(2010: 324)は，過去の「ーシタ」に対する否定として出現した「ーシナイ」は「客観的に〈過去における運動の非実現〉を述べているのではなく，発話時における〈否認〉という〈主体的な否定的主張〉を前面化させている」と述べているが，これは先に見たザトラウスキー(1983)の「見ない」に対する解釈，井上(2001)の主張する「ーシテイナイ」の指示対象の属性叙述という機能を考える上で大いに参考になるものである．

とはいえ，工藤(2010)の見解の中にも明確化が必要な部分がある．なかでも本稿が最も関心があるのは，これまで見てきた先行研究のデータから，過去の「ーシタ」によって表された質問文に対しては少なくとも「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」の否定形式で答えることが可能なのだが，このことと工藤(2010)の言う「相手の肯定的想定」の関係，とりわけ，各否定形式のテンス・アスペクトの機能と「相手の肯定的想定」との関係がどのようなものなのかという点である．

２．５．まとめ

以上，過去の「ーシタ」によって表された質問文に対する否定応答として出現する動詞形式の実態あるいはその解釈に焦点を当てた主たる先行研究を概観した．その結果，明らかになったことをまとめると次のようになる．

i. 過去の「ーシタ」によって表出された質問文に対する否定応答としては，日本語教育の現場における説明とは異なり，「ーシナカッタ」以外の形式，特に，「ーシテイナイ」「ーシナイ」が出現することが少なくない[14]．

[14] 当該質問文に対する否定応答として「ーシテイナカッタ」が出現することもあるが，ザトラウスキー(1983)の調査結果が示すように，その頻度は非常に低いので，本稿では扱わない．

ii. 過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答として「ーシナカッタ」が出現する条件として，ザトラウスキー(1983)は何らかの「語用論的「枠」」の存在，山下(2004)は「過去の場の設定」をあげ，井上(2001)は，当該の「ーシナカッタ」は「当該の出来事の実現想定区間が過去に存在したこと，いいかえれば，過去のある時において当該の出来事が実現される可能性があったこと」を示すが，話し手によって「出来事が実現されないまま終わった経過が把握されていなければ使えない」としている．

iii. 過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答として出現する「ーシテイナイ」については，ザトラウスキー(1983)は当該事態の「非完成の継続」を表したものと捉え，山下(2004)は「過去の場の設定」がない場合の当該質問文に対する否定応答の形式とし，井上(2001)は，話し手が当該事態の過去における実現可能性そのものを認めない場合，あるいは，過去のある時点において当該事態が実現される可能性はあったが，その事態が実現されずに終わった経過を話し手が把握していない場合の当該質問文に対する否定応答形式だとしている．また，井上(2001)は，「ーシテイナイ」には主語が示す対象の属性叙述の機能もあると指摘している．

iv. 過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答として出現する「ーシナイ」については，ザトラウスキー(1983)は，当該事態が過去のある時点あるいは過去の他の時点においても成立しなかったことをひとつの事実全体として伝える形式とし，工藤(2010)は，相手の肯定的想定が言語化された場合に出現し，当該事態の過去における非実現ではなく，発話時における「否認」という話し手の「主体的な否定的主張」を前面化させる形式としている．

v. ザトラウスキー(1983)によれば，「ーシテイナイ」が「ーシナイ」よりも頻出するのは，「ーシテイナイ」に一種の待遇表現的効果があるためである．つまり，「ーシナイ」は当該事態の非生起の事実を伝えるだけだが，「ーシテイナイ」は当該事態の非生起を会話の「今」と結びつけることができ，それが被調査者の調査者に対する協力的な態度の表明に繋がる．

vi. 山下(2004)で紹介されたアッタニーポーン・馬(2002)の調査結果によると，否定応答文に出現する「ーシナカッタ」と「ーシテイナイ」の選択には質問文に出現する動詞の種類が関与する．

次の第 3 節では，質問文に出現する過去の「ーシタ」，その否定応答として出現する「ーシナカッタ」「ーシナイ」「ーシテイナイ」という形式それぞれの機能を規定すると同時に，上にまとめた先行研究が明らかにした内容に即しながら，各形式が出現するメカニズムをその機能という観点から考察する．

３．「ーシタ？」「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」の機能と「ーシタ？」に対する「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」出現のメカニズム

本節では，まず，本稿が対象とする過去の「ーシタ」によって表出された質問文およびそれに対する否定応答の形式「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」の機能がどういうものかを述べ，その後，過去の「ーシタ」に対する否定応答として当該形式の出現するメカニズムをその機能という観点から考えていく．

３．１．「ーシタ？」／「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」の機能

まず，過去の「ーシタ」およびこの形式によって表出された質問文の意味するところについて本稿

の考えるところを述べる．本稿は，過去の「ーシタ」という形式には次に示すような意味機能があると考えている．

(18)　「ーシタ」の機能：(～P & P)

～P = 当該事態の「未成立」　P = 当該事態の「成立」

(～P & P) = 当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化

(18)の(～P & P)は，当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化を示す．つまり，「ーシタ」は当該事態の「未成立」から「成立」への変化を示すだけであり，その変化が発話時以前に起こるのか，発話時以後に起こるのかについては関与しない．しかし，この「ーシタ」が本稿が対象とするような単文あるいは複文の主文に出現した場合には，デフォルトで当該事態の発話時以前の「未成立」から「成立」への変化を表すことになると解釈される．一方，この「ーシタ」が質問文に出現した場合には，次のように解釈されることになる．

(19)　「ーシタ？」の機能：[(～P & P)，～(～P & P)]

(19)は，「ーシタ」の質問文が当該事態の「未成立」から「成立」への変化の真偽の選択を示すことを表したものである．これは，換言すれば，本稿が対象とするような単文における「ーシタ」の質問文は当該事態の「未成立」から「成立」への変化が発話時以前に生起したか否かを問うことを意味するものである．そして，この過去の「ーシタ」の質問文に対して「ーシナカッタ」で答える場合の解釈は次のようになる．

(20) 過去の「シタ？」に対する否定応答「ーシナカッタ」の機能：

[(～P & P)，～(～P & P)] →～(～P & P)

(20)は，過去の「ーシタ」によって表された質問文に対する否定応答「ーシナカッタ」の意味するところを表したものである．これに従うならば，当該質問文に対する否定応答「ーシナカッタ」は，当該事態の「未成立」から「成立」への変化の真偽の選択において，そのような変化が「偽」であること，すなわち，そのような変化が生起しなかったことを選択したことを意味することになる．

次に，過去の「ーシタ」によって表された質問文に対して「ーシテイナイ」で答える場合の解釈については，まずその肯定形式である「ーシテイナイ」をどう解釈するかを明らかにする必要がある．この「ーシテイル」について，本稿は次のような機能を考えている．

(21)　「ーシテイル」の機能[15]：(R (～P & P))

(R (～P & P)) =「当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化」の「結果状態」

---

[15] 本稿が扱う「ーシテイル」は，過去の「ーシタ」に対する否定応答として出現する「ーシテイナイ」の肯定形式，いわゆる当該事態の「結果状態」を表すものだけであり，当該事態の「動作進行」を表すものは対象にしていない．

本稿は，いわゆる完了の「ーシテイル」は，(21)のように，(～P & P)が示す「当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化」の「結果状態 (R)」を表すと考える．従って，この「ーシテイル」の否定である「ーシテイナイ」の機能は(21)のように表されることになる．

(21)　「ーシテイナイ」の機能[16]：～(R (～P & P))

(21)の ～(R (～P & P))は，「(～P & P)が示す「当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化」の「結果状態 (R)」」が「偽」であること，すなわち，そのような結果状態が存在していないことを示している．ここで看過できないのは，この ～(R (～P & P)) が含意するところである．「当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化」の「結果状態 (R)」」が「偽」であるということは，単にそのような結果状態の非存在を示すだけでなく，その結果状態をもたらす契機となる当該事態の「未成立(～P)」から「成立(P)」への変化」が「偽」であること，つまり，そのような変化が生起しなかったことをも意味するということである．この点は後述する過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答「ーシナカッタ」と「ーシテイナイ」との交替において重要な意味を持つことになる．

過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答には「ーシナイ」も出現するが，この形式に対する機能は次のようになる．

(22)　「ーシナイ」の機能：～P

(22)の～P は，これまでの解釈からは当該事態の「未成立」を示すが，本稿はこの当該事態の「未成立」は当該事態の「非存在」と等価であり，同様に，～P に対立する P，すなわち，「ースル」が示す当該事態の「成立」は当該事態の「存在」と等価なものと考える．「ーシナイ」「ースル」の機能をこのように考えるとき，そのデフォルトの解釈は，それぞれ「発話時における当該事態の非存在」と「発話時における当該事態の存在」ということになる．このとき問題になるのは当該事態の「非存在」「存在」の意味するところであるが，本稿は，それらは当該事態の主語が示す指示対象の発話時における属性と解釈する．例えば，「太郎は「徹子の部屋」を見る」という文は，主語の指示対象「太郎」には「「徹子の部屋」を見る」という属性が存在し，「太郎は「徹子の部屋」を見ない」は主語の指示対象「太郎」には「「徹子の部屋」を見る」という属性が存在しないと解釈するということである．

３．２．「ーシタ？」に対する「ーシナカッタ」/「ーシテイナイ」/「ーシナイ」の出現のメカニズム

本項では，上で見た「ーシタ？」「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」の機能という観点から，過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答として「ーシナカッタ」「ーシテイナイ」「ーシナイ」が出現するメカニズムを考察すると同時に，第 2 節の先行研究概観で指摘された各否定応答形式の特徴との関係を明らかにする．

---

16 「ーシテイナイ」は，結果状態の「ーシテイル?」による質問文に対する否定応答として出現することもあるが，その際には次のような真偽の選択がある．[R(～P & P),～R(～P & P)]→～R(～P & P)

３．２．１.「ーシタ？」に対する「ーシナカッタ」

まず，過去の「ーシタ」による質問文の否定応答として「ーシナカッタ」が出現する場合のメカニズムを考えてみよう．本稿によれば，それは先に見た(20)のように解釈される．

(23)(=(20)) 過去の「シタ？」に対する否定応答「ーシナカッタ」の機能：

$$[(\sim P \,\&\, P),\ \sim(\sim P \,\&\, P)] \rightarrow \sim(\sim P \,\&\, P)$$

(23)(=(20))において重要なのは，「ーシナカッタ」が出現する際には，[(～P & P)，～(～P & P)]が示す当該事態の「成立」((~P&P))とその「非成立」(~(~P&P))の選択の可能性が予め設定されているという点である．換言するならば，このような選択の設定なしに，いきなり当該事態の「非成立」が提示されるのは日本語では難しいということである[17].

その根拠としては，第 2 節の 2.5.ii で指摘された「ーシナカッタ」が出現する際の特徴，条件がある．ザトラウスキー(1983)は，過去の「ーシタ？」に対して「ーシナカッタ」で応答する場合には何らかの「語用論的「枠」」が必要だと指摘していたが，本稿の観点からすると，この「語用論的「枠」」というのは，「対話者間あるいは応答者における当該事態の「成立」と「非成立」の選択の設定」に他ならない．ザトラスキー(1983: 57-58)によると，その「語用論的「枠」」は専ら話し手の側によって設けられるもののようだが，本稿の当該事態の「成立」と「非成立」の選択は対話者間双方の了解で設定されたときに最も安定したものとなる．言い換えるならば，少なくとも応答者側においてこの選択が設定されていないときに過去の「ーシタ？」の質問文が発せられると，それは，山下(2004)が指摘したように，応答者にとっては「唐突」なものに感じられると同時にその質問に対して「ーシナカッタ」で答えることは難しくなるのである．このように考えるならば，山下(2004)が「ーシナカッタ」が出現するための条件としていた「過去の場の設定」というのも，本稿が言う「対話者間あるいは応答者における当該事態の「成立」と「非成立」の選択の設定」と解釈できるであろう．

山下(2004)が「ーシナカッタ」の出現の条件とした「過去の場の設定」とは，過去の出来事が文脈の中で言語的に明示されることを指していたが，本稿の解釈によれば，過去の「ーシタ？」に対して否定応答「ーシナカッタ」が出現するためにはそのような文脈の明示化は必ずしも必要ではない．なぜならば，前述したように，過去の「ーシタ」による質問文に対して否定応答「ーシナカッタ」が出現するのに必要なのは，対話者間あるいは応答者において当該事態の「成立」と「非成立」の選択の可能性が予め設定されていることであり，山下(2004)の言う言語化された「過去の場の設定」は，結局，そのような選択の設定を容易にするひとつの言語環境に過ぎないからである．

３．２．２.「ーシタ？」に対する「ーシテイナイ」

次に，過去の「ーシタ」による質問文に対して否定応答「ーシテイナイ」が出現する場合のメカニ

---

[17] 本稿の見方に対して，ザトラウスキー(1983: 58)は「「見ナカッタ」の意味は「『昨日見ない』ということが成立（完成）した．そのことを事実として述べているだけであって，発話時との直接的な関係については言及していない」ということである.」と述べている．この考えに従うならば，ザトラウスキーは「ーシタ」の機能が及ぶ事態として『昨日見ない』という否定命題を想定していることになる．その結果，ザトラウスキーにとって，「見ナカッタ」は「見ナイ」という事態の「成立」を表したものと解釈されることになるが，本稿にとっての「見ナカッタ」は「見ル」という事態の「非成立」を表すものである．

ズムを考える．まず，(24)を参照されたい．

(24) a. 「－シテイル」の機能：(R(～P & P))≺ (～P & P)
b. 「－シテイナイ」の機能：～(R(～P & P))⊀ (～P & P) = ～(R(～P & P))≺～(～P & P)

(21)でも見たように，(R(～P & P)) は，「－シテイル」が当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化が生起した後の「結果状態(R)」を表すことを示している．このとき重要なのは，「－シテイル」が当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化を含意しているという点である．(24a)における (R(～P & P))≺ (～P & P)) の ≺ (～P & P) は (R(～P & P))が (～P & P) の結果であること，つまりは，(～P & P)を含意していることを表したものである．「－シテイル」の機能をこのように考えるならば，その否定である「－シテイナイ」の機能は～(R(～P & P))と示されることになるが，これは，「－シテイル」が含意する当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化の否定に繋がる．というのも，当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化が生起したにも拘らず，その結果状態が存在しないという状況は世間知的に理解しがたいからである．従って，(24b)における ～(R(～P & P)) ⊀ (～P & P)の ⊀ (～P & P)は「－シテイナイ」が当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化を含意しないことを表し，それは，結局，～(R(～P & P))を表す「－シテイナイ」が ～(～P & P)を表す「－シナカッタ」を含意することを示すことになる．つまり，過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答として「－シテイナイ」が出現するのは，この形式自体が当該事態の「非成立」(～(～P & P))を含意することに因るのである．

以上の「－シテイナイ」の機能と前項で提示した「－シナカッタ」の機能を考え合わせるならば，先行研究で指摘された「－シナカッタ」と「－シテイナイ」の特徴は，次のように説明されることになる．

まず，過去の「－シタ」による質問文であるにも拘らず，その否定応答として「－シナカッタ」と「－シテイナイ」の両方の形式が出現するという事実は，次のように説明される．当該質問文に対する否定応答として「－シナカッタ」が出現するのは，対話者間あるいは応答者に当該事態の「成立」と「非成立」の選択が設定されているときであり，そのような選択可能性が設定されていないとき，あるいは，設定されにくいときには，当該事態の「非成立」を含意する「－シテイナイ」が優先的に出現する．当該事態の「成立」と「非成立」の選択は，井上(2001)が指摘するように，当該事態の実現想定区間を過ぎたときにこそ可能になるものであることから，「－シナカッタ」の出現に対する上記の説明は，これまで日本語教育の現場で行われてきた「質問文の事態が実現可能な生起時とその質問に対する応答時が遠くかけ離れているときに使われる」という説明とも合致するものである．

一方，過去の「－シタ」による質問文に対する否定応答として「－シテイナイ」が出現する場合には，少なくとも応答者側には当該事態の「成立」と「非成立」の選択が設定されていなかったこと，また，応答者にとって当該事態は「非成立」であることが示されることになる．第 2 節の 2.5. iii で見た井上(2001)の指摘，すなわち，話し手が当該事態の過去における実現可能性そのものを認めない場合，あるいは，過去のある時点において当該事態が実現される可能性はあったがその事態が実現されずに終わった経過を話し手が把握していない場合に「－シテイナイ」が現れるという指摘は，いずれも応答者が「当該事態の「成立」と「非成立」の選択」を設定していないことに因ると考えられる．また，「－シテイナイ」は当該事態の発話時における「結果状態」を表す「－シテイル」の否定形であ

ることから，この形式は当該事態の「非成立」という状況を発話時と直接関連づけることもできる．その結果，「ーシテイナイ」は，ザトラウスキー(1983)が指摘するように待遇的表現効果を出したり，井上(2001)が指摘するように，主語が指示する対象の属性叙述を表すこともできるようになる[18].

さらに，上で提示した「ーシナカッタ」と「ーシテイナイ」の機能は，第 2 節の 2.5. vi で指摘した「否定応答文に出現する「ーシナカッタ」と「ーシテイナイ」の選択には質問文に出現する動詞の種類が関与する」という現象もうまく説明する．山下(2004)で紹介されたアッタニーポーン・馬(2002)の調査結果によれば，「見える」「聞こえる」のような知覚動詞の自発態，「分かる」のような内的状態動詞，「できる」のような能力を表す動詞は否定応答として専ら「ーシナカッタ」の形式しか取らないが，それはこれらの動詞がいずれも動作主のコントロールが及ばない事態を表すからだと考えられる．つまり，それらの動詞が示す事態の生起には動作主の意図は関与しないことから，その過去の「ーシタ」は，単に応答者が当該事態を知覚あるいは認知したか否かを問う形で，応答者側に「当該事態の「成立」と「非成立」の選択」の設定を容易にさせ，その結果，「非成立」を示す「ーシナカッタ」も出現しやすくなるのである．また，知覚動詞の自発態，内的情態動詞，「できる」のような能力を表す動詞は基本的に状態動詞であることから，「ーシテイル」は取りにくく，その結果，その否定形である「ーシテイナイ」も出現しにくいということも「ーシナカッタ」の頻出に関係しているであろう．

３．２．２．「ーシタ？」に対する「ーシナイ」

最後に，過去の「ーシタ」による質問文に対して否定応答「ーシナイ」が出現する場合のメカニズムを考える．まず，本稿における「ーシナイ」の機能を再度確認しておく．(25)を参照されたい．

(25)(=(22))　「ーシナイ」の機能：～P

先にも見たように，「ーシナイ」の機能 ~P は発話時における当該事態の「非存在」を意味するが，これは発話時において当該事態の主語の指示対象に当該事態が表す属性が備わっていないことを表すに等しい．このような解釈は，工藤(2010)の「ーシナイ」は「客観的に〈過去における運動の非実現〉を述べているのではなく，発話時における〈否認〉という〈主体的な否定的主張〉を前面化させている」に通じるものである．工藤(2010)の指摘を本稿の観点から解釈するならば，次のようになるからである．

過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答「ーシナイ」は，当該事態がその主語の指示対象の属性ではない，従って，当該質問文が問題にする当該事態がその主語の指示対象において「成立」することはない，結果，当該事態は成立しなかった，という推論の成立を期待して出現したものと思われる．ただし，この推論が有効に働くためには，工藤(2010: 323)が指摘したように，前文において「相手の肯定的想定が明示（言語化）されている」必要がある．そうしないと，非過去「ースル」の否定である「ーシナイ」は指示対象のポテンシャルな属性を表すことになるからである．以上のことは，工藤(2010)の，当該「ーシナイ」は「発話時における話し手の主体的な（パフォーマティブな）な打ち消し」という指摘，また，「「なんか」「など」を伴って，「ありえない」といった〈話し手の評価的感情〉が前面化する場合が多い」ということとも矛盾しない．なぜなら工藤のこの指摘は，「ーシ

[18] Cf. 本稿第 2 節 2.5. iii および iv.

ナイ」が指示対象の属性を表したものであることを明示したものと解釈できるからである．

ところで，主語が示す対象の属性表示という点について，井上(2001:135-136)は「－シテイナイ」を指示対象の「一種の属性叙述」と捉えていた．ここで問題になるのは，この井上の言う「－シテイナイ」が表す指示対象の属性とここで扱っている「－シナイ」が表す指示対象の属性の違いである．このことについて，本稿は次のように考える．

上でも述べたように，「－シナイ」は基本的に非過去「－スル」の否定であり，それが指示対象の属性を表すのもこの形式に「非過去表示」という基本的機能が備わっているからである．また，過去の「－シタ」による質問文に対する否定応答として「－シナイ」が出現する際の必須条件として「相手の肯定的想定が明示（言語化）されている」ことがあるのも，そのためであった．それに対し，「－シテイナイ」が表す指示対象の属性は，井上(2001:120, 136)が指摘する「過去の出来事を，発話時において有効なある統括主題(複数の類似の出来事の背後にある一つの状態)に従属する一事例として述べる」「－シテイル」の「経験・記録用法」の応用結果と言える．つまり，「－シテイナイ」は，「－シナイ」とは異なり，その肯定形式である「－シテイル」が持つ「経験・記録用法」と同じく常に過去の事態に言及し，それを指示対象の属性として提示するのである．以上をまとめるならば，「－シナイ」が表す指示対象の属性は同形式の「非過去表示」という機能に基づくポテンシャル性を備えたものであるが，「－シテイナイ」が表す指示対象の属性は常に過去に生起した具体的な事態に基づくものということになる．

４．結論に代えて

以上，過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答としてどのようなテンス・アスペクト形式が出現するか，また，その出現のメカニズムはどのようなものかを，主に先行研究で提示されたデータを基に検討してきた．その結果は，以下のようにまとめられる．

- 過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答として出現する形式としては「－シナカッタ」「－シテイナイ」「－シナイ」がある．
- 過去の「－シタ」によって表された質問文に対する否定応答形式「－シナカッタ」「－シテイナイ」「－シナイ」の出現のメカニズムは以下のとおり．

①「－シナカッタ」: [(～P & P), ～(～P & P)] →～(～P & P)

過去の「－シタ」による質問文に対する否定応答として「－シナカッタ」(～(～P & P))が出現する際には，対話者間あるいは応答者において当該事態の「成立」(～P & P)と「非成立」(～(～P&P))の選択が設定されており，当該「－シナカッタ」はこの選択において「非成立」が選ばれたことを示す．換言すれば，対話者間あるいは応答者においてこの選択が設定されていないとき，過去の「－シタ」による質問文に対する否定応答として「－シナカッタ」が出現するのは難しく，そのような場合に出現した「－シナカッタ」は不自然になる．

②「－シテイナイ」: ～(R(～P & P))≮ (～P & P) = ～(R(～P & P))<～(～P & P)

過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答として出現する「ーシテイナイ」(～(R(～P & P)))は当該事態の「結果状態」を表す「ーシテイル」(R(～P & P))の否定である．その肯定形式である「ーシテイル」が「当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化(～P & P)」を含意するのに対し，「ーシテイナイ」はその変化を含意しない(～(R(～P & P)) ≠ (～P & P))．一方，「ーシテイナイ」が当該事態の「当該事態の「未成立(~P)」から「成立(P)」への変化(～P & P)」を含意しないということは，それが当該事態の「非成立」(～(～P & P))を含意することに繋がる．つまり，過去の「ーシタ」によって表された質問文に対する否定応答として「ーシテイナイ」が出現するのは，この形式自体が当該事態の「非成立」を含意することに因る(～(R(～P & P))<～(～P & P))．このような「ーシテイナイ」が過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答として出現するのは，特に，応答者において当該事態の「成立」(～P & P)と「非成立」(～(～P&P))の選択が設定されていない場合あるいはそのような選択が設定されにくい場合である．

③「ーシナイ」：～P

「ーシナイ」は発話時における当該事態の「未成立(~P)＝非存在」を意味するが，これは発話時において当該事態の主語が示す指示対象に当該事態が表す属性が備わっていないことを表すに等しい．このことから，過去の「ーシタ」による質問文に対する否定応答「ーシナイ」は，当該事態がその主語の指示対象の属性ではない，従って，当該質問文が問題にする当該事態がその主語の指示対象において「成立」することはない，結果，当該事態は成立しなかった，という推論の成立を期待して出現したものと考えられる．しかし，この推論が有効に働くためには，前文において「相手の肯定的想定が明示（言語化）されている」必要がある．そうでなければ，非過去「ースル」の否定である「ーシナイ」は指示対象のポテンシャルな属性を表すことになるからである．

参考文献：

庵功雄(2001)：『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク

井上優(2001)：「現代日本語の「タ」ー主文末の「…タ」の意味についてー」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』，97-159

工藤真由美(1995)：『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房

-----(2010)：「現代日本語の否定とアスペクト・テンス」加藤・吉村・今仁編『否定と言語理論』, 308-330.

ザトラウスキー，ポリー(1983)：「プラグマティックスから見た日本語の動詞のアスペクトー特に否定形の場合において」『言語学論叢』2, 48-64

福田嘉一郎(2001)「「タ」の研究史と問題点」『言語』Vol.30, No.13, 32-39

山下好孝(2004)：「テンスの「タ」とアスペクトの「タ」」『北海道大学留学生センター紀要』第 8 号, 1-13